

## ニュージーランド便り(1)

### クームス教授の引退と後任教授の選定

河内 洋 佑<sup>1)</sup>

極めて低変成度の変成岩において沸石による分帯が可能であることを発見し、沸石相という変成相を確立したことで日本でもよく知られているオタゴ大学のダグラス・サクソン・クームス教授が65歳で定年退職した。クームス教授は34年間にわたって地質教室の主任教授であっただけに、一つの時代が終わったという感慨をまぬかれることができない。

ニュージーランドは人口僅か330万人(もちろん昔はもっと少なかった)で、しかも南太平洋の孤立した国である。したがって学問の発展にとって欠かすことのできないろいろな交流には困難をともなった。その名残りはいまでも残っている。たとえば大学の学年は2月から11月であるが、卒業式は翌年の5月に行なわれる。これは卒業成績を母国であったイギリスに送って承認を得るのに、郵便が船で往復6カ月かかったときの習慣をそのまま残しているからである。それにもかかわらず、何故か

昔から高名な学者をたくさん生みだしてきた。原子核崩壊の発見者として近代物理学の父ともいえるラザフォード卿は、ニュージーランドの南島の小さな町ネルソンの出身で、基礎教育はニュージーランドで受けたのであった。地質学関係では、超塩基性岩の研究で有名なベンソン、変成岩のターナー、地形学のコットン、鉱物学のハットン、鉱物学・隕石学のメーソン、構造地質学のウェルマン、結晶化学のファイフなどがすぐ思い出される。

ニュージーランドはまた、スポーツや文化の面でも小国に似合わない成績を残してきた。ソウル・オリンピックの成績について、金メダル3点、銀メダル2点、銅メダル1点として、総点数と人口のグラフ(第1図)を作ってみると、ニュージーランドが東ドイツ級の活躍をしていることがわかる。最近ではラグビーの世界選手権者として近年無敗を誇るオールブラックスがあり、また女子ネットボール、女子スカッシュの世界選手権も保持している。

余談はさておき、ニュージーランドには地質教室が六つある。いずれも国立大学である。このうちオタゴ大学を含む四つの大学で、ここ数年のあいだに教授が交代し

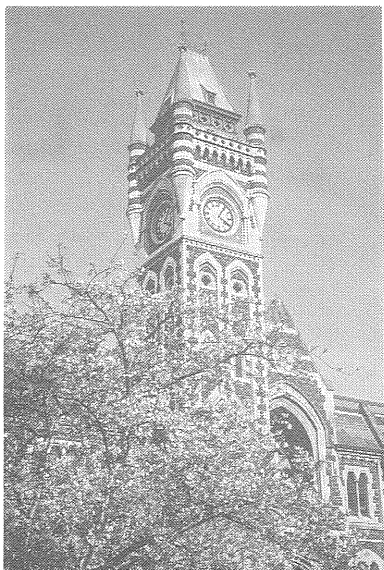


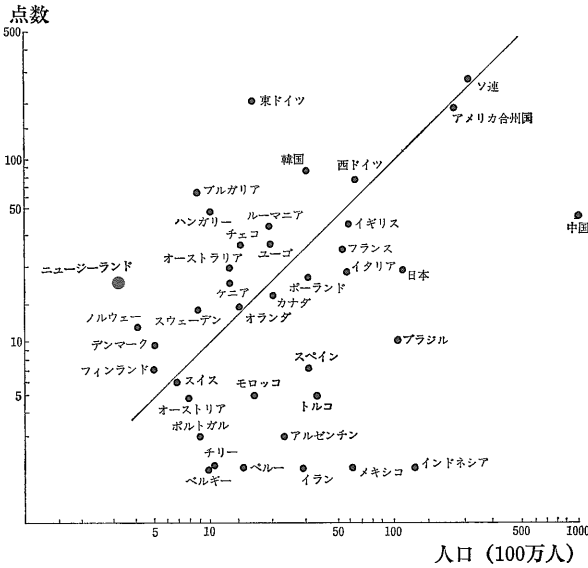
写真1 オタゴ大学本部の時計塔。ネオゴシック建築のこの建物は1869年にできた。(ドン・ウェストン撮影)



写真2 オタゴ大学の紋章のステンドグラスの向こうに本部の時計塔がみえる。紋章の下のラテン語 Sapere Aude は Dare to be wise (知識を得ることに挑戦せよ) という大学のモットー。

1)ニュージーランド オタゴ大学: Geology Department, University of Otago, P. O. Box 56, Dunedin, New Zealand

キーワード: ニュージーランド, オタゴ大学, クームス教授, 後任人事



第1図

ソウル・オリンピックはボイコットもなく、12年ぶりに世界の全ての国が一堂に会したということで、世界のスポーツの現状を見るのにまたとない機会を提供した。参加160か国（属領を含む）中、52か国が何らかのメダルを獲得した。金3点、銀2点、銅1点として、総合点を計算し、人口と比較したのがこの図である。その反面、100か国以上は何のメダルもとれなかったもので、この図には示されていない。しかし世界の主要国は大体何らかのメダルをとっているのだから、大勢を見るのには差支えないであろう。また総合点5点以下での変動はあまり有意でないと思われるので、除いて相関係数を計算してみた。直線回帰の相関係数は0.8337でかなり高い。なお、図上にひいた直線は、人口100万人につき1点を取る場合（点数＝人口/100万人）を表わし、一般的傾向を比較的良く示していると思われるので、参考までに図示した。この直線から左に離れる程（厳密には点数/人口比の高い程）人口の割に良い成績をあげたことを表わしている。

た。ニュージーランドの地質学研究事情は大きな転機に直面している。実は人事面だけでなく、予算面でも、管理面でも変化しようとしているのである。それについては今後この紙面を借りてお伝えしたいと思う。ただここではニュージーランド地質調査所でも最近研究職150人中から11人の研究者が退職させられたことだけを記すにとどめる。ニュージーランドの地質学研究が過去の栄光を引続き保持できるかどうかは、残念ながら疑わしい面がなきにしろあらずという事情になってきている。

さてニュージーランドではイギリス型の教室構成をとっている。すなわちふつう教授は一名で、以下助教、上級講師、講師からなっている。以上の職員は講義や実験を担当するが、このほかに古参の大学院生のうち若干名が、実験助手として臨時的にやとわれている。このほか上記の教育職員とはほぼ同数の非研究職員がおり、エレクトロニクス工作、金属工作、写真、標本管理、薄片製作、教室事務、秘書、タイピスト、清掃などにあたっている。教授の権限と責任は、以上の全職員の人事、教室の運営、研究指導、講義、進級・卒業論文指導において極めて大きく、また大学の評議員会にも出席して大学全体の運営にも発言しなければならないので、教室の浮沈はいわば教授が握っているといってもよいほどである。したがって、クームス教授の後任選びは大学としても教室としても重大な関心事であり、また重要な地位であるから、年功序列制によって助教が昇進することは全く考えられなかった。後任の募集は全世界を対象に行なわれた。Geotimes や EOS に募集広告が出されただけでなく、国内の一般新聞にも広告が出された。

その結果、締切りまでに45名の応募者があった。一番

若いのは34歳のポストドクトレートで一番年寄りには58歳の研究者だった。しかし大体において40代前半の人が多く、30代後半から40代前半のアクティブな研究業績のある人をとりたいという大学（教室）の意向に添う応募者があったことは喜ばしい。応募者を国別にみると、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカ、イギリスなどであったが、非英語国からの応募も二、三あった。ただし日本からの応募がなかったことは残念である。オタゴ大学からは助教授、上級講師、講師各一名の計三名が応募した。オタゴ大学の他の二名の助教授は応募しなかった。

以上の応募者の中から五名が第二次リストに残った。この五人はオタゴ大学の費用により招かれて、それぞれ約一時間半にわたり研究セミナーという形で講演をおこなった。これは公開で行なわれ、学部学生はもとより、学部長その他非地質専門家も参加した。そのあと一人一人の候補者を囲んで座談会が行なわれ、「もし教授になったら教室の運営についてどういう方針を持っているか」、「研究と教育についての基本的考え方を聞きたい」、「オタゴ大学に応募した理由は何か」などという質問攻めにあつた。質問は職員からだけでなく、学生も活発に質問していたことが注目される。このように選ばれた少数を招いて講演してもらい一種の面接を行なうことは、ニュージーランドのように特に孤立した国の場合費用は馬鹿にならないが、現在アメリカなどをはじめとして、主要な大学で次第に採用されるようになってきた選抜方法であるという。今回の候補者のうちのある人は、紹介によると過去10年間に120編の論文を発表しているそうである。講演の終わったあとで「あれは人間じゃな

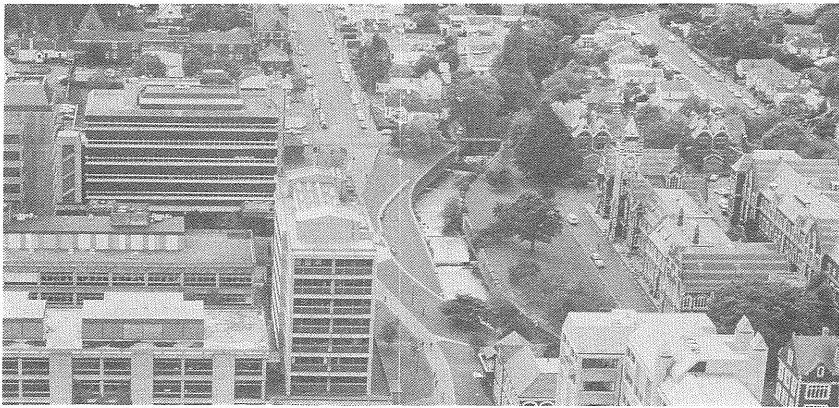


写真3

オタゴ大学のキャンパスの主要部。右手に本部の時計塔、その右(右端)のネオゴシック建築は地質教室。写真上部の赤レンガや右上部の平屋はほとんど学生の寮やアパート。

くて日本製のロボットじゃないのか」などとこっそり冗談をいう人もあった。この五人がいずれも現在油ののりきった先端的な研究者であることに疑いはないと見受けられた。

最終的な結果はまだ発表されていないが、クームス教授の後任の赴任は1990年11月頃(学年末)が予定されている。

このような選抜方法はうまくいくといいが若干の欠点もある。別の大学の例だが、第一候補者が都合で決定後辞退してしまったため、第二候補者にお鉢がまわったことがあった。このときには二番目の人にとって自分がベストチョイスではなかったことは明らかであり、感情的しこりとなって残ったという。今回教室内から三人の応募があったのにもかかわらず、いずれも五人の中にも選ばれなかった。これは私の感想であるが、もし誰かが選ばれていたなら、昨日までの一番若い人が教室のトップに

いきなり昇ることもありえたわけで、そういうとき果して教室内にしこりが全くないのかどうか、いささか興味あることになるところであった。西洋人は実績一本槍と日本では信じられているかもしれないが、必ずしもそうではない。特に人事管理などでは人柄なども無視できないのは当然のことである。今回のようにいわば飛越し昇任を狙うなら、別の大学に応募した方がチャンスがあるとはっきり言う人もある。

英連邦諸国では、年金をはじめ社会保障が、協定によって、国が替わっても継続通算されることになっているところが多い。そのためこれらの国の間では大学を移りやすいという事情があることも忘れることはできない。また、ニュージーランドでは年金受給資格は十年で生ずるので、かなり年齢の多い人でも転職しやすい。もちろん若い人にとっては、十年位すぐたってしまうので、この面での不安は全くないと言える。

追記: Coombs 教授の後任は、カリフォルニア大学サンタバーバラ校のリチャード H. シブソン (42歳) に決った。1990年8月に着任が予定されている。

KAWACHI Yosuke (1990): Retirement of Prof. D. S. Coombs, University of Otago, and the selection of successor. —Letters from New Zealand (1)—.

<受付: 1990年3月7日>



写真4 モエラキ半島のドレイト・シル (クームスと中村保夫氏の研究がある) の上で。クームス教授と筆者。(ドン・ウェストン撮影)